(夏休み雑感⑩)　「鳩山内閣誕生」今昔

「鳩山内閣」と聞くと、半世紀以上前の高校生の頃の政界を思い出す。当時(1954 年)、自由党の吉田内閣が総辞職した後に、日本民主党の鳩山一郎氏が首班指名されて、やはり「鳩山内閣」が誕生した。

今日では、歴代首相の中で吉田茂氏の評価は一般にかなり高いようだが、当時は、あまりに長く政権を担当していたこともあり、新聞などでは「ワンマン」と評され、決して好意的には報じられていなかった。

しかも、吉田政権末期の自由党は第一党ではあっても、過半数を制していたわけではなく、野党が結束さえすれば、その政権基盤はあやういものだった。同年 12 月になって、当時の日本民主党、左派社会党、右派社会党は共同で、内閣不信任案提出の構えを見せ、吉田内閣は総辞職か衆議院解散かの二者択一を迫られた。

吉田茂首相は、当初、解散を断行しようとしたが、その不人気ぶりを危ぶんだ閣僚や与党議員の多数がこれを認めず、遂に総辞職のやむなきに至ったのである。そして、左右両派の社会党は、早期の総選挙実施を条件に、第二党の日本民主党から首班を出すことを認めたため、「鳩山内閣」が誕生し、新聞は、概ねこれを歓迎ムードで報道した。

周知のとおり、麻生前首相は吉田茂氏の孫であるから、奇しくも半世紀以上の時を隔てて、祖父から祖父へ、そして、それぞれの孫から孫へと政権が移行したことになる。

ただ、大きな違いは、半世紀以上前のケースでは、もともと与党が少数であったため、解散総選挙を経ず、国会内の党派間の談合で、政権が移行したのだが、今回は、堂々と総選挙を戦い、「政権交代」を掲げた鳩山代表率いる民主党が、麻生総裁率いる自民党に圧勝した結果としての政権移行である。

このように総選挙で示された民意に基づく、実にわかり易い政権交代であるにもかかわらず、今回は、半世紀以上前に「鳩山ブーム」とメディアが評したほどの一般の熱狂ぶりは見られない。しかし、一党に 308 議席というかつてない大勝利を与えた多くの国民は、これから何が変わるか、ほんとうにマニフェストは実行されるのかなど、固唾を呑んで見守っているというのが現在の状況ではないだろうか。

これは、新閣僚たちの就任会見の際のテレビ視聴率が、深夜の時間帯にしては異例の高さだったということにもよく表われていると思う。

私自身もそのテレビをかなり見たが、以前にはよくあったメモの棒読みや、ちょっとした質問にも、「これからよく勉強します」式の素人丸出しの答弁は見られず、それぞれの分野のエキスパートを配した実務型の内閣と感じられた。きっと、各省庁の官僚が書いたメモなど必要としない人たちをきちんと人選したのだろう。

いずれにせよ、今回の総選挙で投票率は上昇したし、その上、政権交代が現実に起こったことで、国政に関心を持つ人は確実に増えていると思う。私自身も、今まで以上に政治の動きをウォッチしていく心積もりである。